

# 組織目標評価報告書（平成23年度）

部局名：埋蔵文化財調査研究センター

目 標	目標の達成状況(成果)及び新たに生じた課題への取組 (部局での検証とそれに対する取組)
<b>①教育領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>①-1 目標</b>	<b>自己評価</b>
①「博物館実習」の一部を分担し、調査研究とその成果を教育活動に活かす。 ②学習・研究の場として、授業や学生の受け入れに努める。	①平成23年度の博物館実習は、鹿田遺跡第22次発掘調査現場(地域医療支援センター)と本センター内で実施した。期間は8月8日～18日の間で、約30名の受講生が3班に分かれ、各2日間の実習を行った。1班9～10人の少人数構成、そして現場での体験は、習熟度を高める上で極めて効果的であった。また、発掘調査への参加は、単に考古資料の取り扱いに関する知識のみならず、自らの生活の場(岡大・地元)と歴史とを強く結びつける効果を生み出し、学芸員としての本質的素養形成に寄与することとなった。 ②授業・研究の場としては、発掘現場および本センターにおいて、考古学授業を2回にわたって受け入れた。また、オンザジョブトレーニングを通じて、考古学の専攻生には、多岐にわたる研究素材を提供し、また、一般学生に対しては、大学の講義や実習では体験できない社会性を身につけるなど、学生のスキルアップに資することができた。全体として、目標以上の成果を上げることができた。
<b>①-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	
<b>②研究領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>②-1 目標</b>	<b>自己評価</b>
①センター教員の個別研究を進め、全教員が科研費などの申請を行い、外部資金の獲得に努める。 ②津島岡大遺跡をはじめとする埋蔵文化財の調査研究に関して、関連科学分野や周辺の自治体との連携を強化し、幅広い研究分野に資するような研究の推進に努める。 ③研究成果を紀要あるいは展示会などで発表する。	①センター教員は5名全員が科研費への応募を行った。そのうち3名が採択され、さらに3名は研究分担者として外部資金を獲得し、成果を上げている。 ②津島岡大遺跡における弥生時代水田の調査成果をもとに、岡山県教育委員会・岡山市教育委員会と、また、関連分野である地質学の研究者(理学部)と、それぞれに連携し、水稲農耕の開始に関する諸問題の総合的実態解明に積極的に取り組み、今後の研究の深化の足がかりを構築した。岡山大学を会場とした中四国縄文研究会岡山大会の開催を支援し、資料提供を行い、学界の研究推進に寄与した。 ③水稲農耕の開始に関する研究成果を、展示会やシンポジウムに反映する形で発表した。津島岡大遺跡を中心に岡山平野での縄文時代栽培植物の研究成果を紀要に発表した。鹿田遺跡18次調査出土の木製品が、最古の猫形木製品の人形であることを記者発表し、マスコミから多くの取材をうけた。以上、いずれの項目においても十分に目標を達成することができた。
<b>②-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	
<b>③センター業務領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>③-1 目標</b>	<b>自己評価</b>
①構内遺跡の発掘調査を実施する。調査にあたっては、記録のデジタル化を図るなど、新たな調査方法を積極的に導入し、調査の効率化と質の向上に努める。 ②発掘調査の成果を現地説明会において、学内外に積極的に公開する。 ③鹿田14次調査(岡大病院病棟)に同10次調査と18次調査の一部を加えた発掘調査報告書を刊行する。 ④鹿田21次調査(岡大病院環境整備)の発掘調査報告を紀要に掲載する。 ⑤津島岡大34次調査(国際交流会館)の発掘調査報告を紀要に掲載する。 ⑥『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』を刊行する。 ⑦『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』46号・47号を刊行する。 ⑧鹿田地区・津島地区における発掘調査資料の整理作業を進める。 ⑨木器の保存処理を進める。 ⑩展示会を開催し、学内外に調査成果を積極的に公開する。 ⑪保管資料に関して見直しを行い、適切な保管体制の確立を図ることによって、空間の効率的利用と経費の節減などに努める。	①発掘調査では、鹿田地区で22次調査(533㎡)を実施した。期間は延べ5ヵ月におよんだ。記録に際しては、デジタル機器を積極的に使用し、作業の迅速化を図った。 ②発掘調査において現地説明会を2回にわたって企画したが、雨天のため、両日ともに十分な開催ができない状態となった。しかし、それにもかかわらず、学内外から約30名の見学者があり、一定の成果をあげることができた。 ③鹿田14次調査他の報告書については、内容面でより一層の充実が図られ、年度内にほぼ原稿を整え、来年度初めに刊行することとなった。 ④⑤の調査報告は予定通り紀要に掲載した。 ⑥⑦センター紀要2010、センター報46号・47号を予定通りに刊行した。 ⑧調査資料の整理は、鹿田遺跡9・11・17～21次調査、津島岡大遺跡第34次調査などについて、洗浄・注記・復元作業を進めた。特に、本年は、効率化のために機器をレンタルして注記作業を行い、作業の推進をはかった。 ⑨木器保存処理は、第10期の作業を行った。 ⑩岡山大学創立50周年記念館で2011年7月13～18日に展示会を開催し、223人の見学者が来場した。新企画の考古学カフェには39名が参加し、好評を博した。12月には学内外の研究者3名によるシンポジウムを開催し、104名の参加を得た。こうした取り組みはマスコミでも大きく取り上げられた。 ⑪保管資料の見直しを行い、目的に応じた保管・登録へと改善を図った。また、遺物収蔵スペースの確保についても安定的管理に向けて改善がなされた。以上、いずれの項目においても、目標を達成することができた。
<b>③-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	
<b>④社会貢献(診療を含む)領域</b>	<b>自己評価</b>
<b>④-1 目標</b>	<b>自己評価</b>
①近隣の自治体などが開催する講座などの活動に協力し、社会との連携・協力を寄与する。 ②職場体験などの中学生等を受け入れ、社会との連携、協力を寄与する。	①岡山県古代吉備文化財センターが企画する「津島遺跡セミナー」と「津島遺跡文化財講座」の講師を依頼され、構内遺跡の成果を含めて紹介した。 ②職場体験は、中学校2校から各3名(計6名)を受け入れた。11月と2月に各3日間である。学校活動への積極的協力を果たすことができた。以上、いずれの項目においても、十分に目標を達成することができた。
<b>④-2 目標とする(重要視する)客観的指標</b>	
<b>【総括記述欄】</b>	
発掘調査のほか、特筆されるのは山積状態にある発掘調査資料の整理が進んだ点である。基礎的整理は、機器の導入を得て7地点の作業に取り組み、さらに報告済みだが一部未整理状態であった鹿田1次・2次調査資料にも手を加えることができた。報告書作成面では、津島地区1件、鹿田地区1件の正式報告を完了し、鹿田地区3件の報告もほとんど準備ができた。鹿田地区の発掘調査報告は、出土遺物の多さから整理が長期化する状態が危惧されているが、その一部が改善された点は大きな成果である。教育面では、オンザジョブトレーニングへの参加学生が広がりをみせ、教育の場としてセンターならではの可能性を高めた。社会貢献では、周辺自治体との連携を展示会や講座などを通じて継続し、例年通り好評であった展示会では新企画がさらなる可能性を示した。出土遺物の記者発表も加わり、学外への情報発信にも十分な成果を得た。シンポジウムは、研究成果の発表を通じて研究面の強化にもつながった。来年度も、さらなる研究面での推進が求められる。また、蓄積された遺物の効率的な管理・保管体制を構築するための準備を行った。来年度はそれを実現することが急務である。	